

寄 書

東京美術學生々活 紫舟生

現今東京に於ける美術學生（但し洋畫のみ
に就て云ふ）の遊學費は幾何を要するか、
僕は不日笈を負ふて東京に學ばんとする地
方諸君の爲めに、いさゝか自己の經驗によ
つて、この問題を御紹介しやうと思ふ、併
し僕は私立研究所に碌々として研究しつゝ、
ある一貧生である、贅澤生活は話しに丈承
知して、實驗して見たことは一度もない、
一體この問題は殆んど程度がない、富豪の
坊ちやんで道樂に美術家にもならふと云
ふ連中は、一ヶ月三十圓でも五十圓でも費
つてるのもある、官立の美術學校にはそん
なのが大方あるよふだ、美術學校では遊學
費が最儉約貳拾圓はかゝると云つてる、マ
アそんなポツポの濫い御方には學資など知
る必要もなかるふ、僕は只眞面目に私立
の研究所に入り、出来る丈節約苦學して、
自分の大目的を貫かうと言ふ諸君の爲めに
只普通以下の生活に就てのみ述べる積りて
ある、但しいくら節約くと云つた處で、

彼の新聞賣子的苦學生のよふに寒中に單衣

一枚で、青菜のよふな顔をして、ぶろく
遣つてるのは感心しない、健康を壞してま
て遣るのは決して賞すべきことではない、
事の本末を誤まつたものだ、故に僕は健康
を害せず、勉學に差支へなき範圍に於て、
御話するものと御承知を願います。
説明の便宜上、先づ四種類に分ち順序を追
ふて述へることにしましやふ

第一普通下宿生活、第二下等下宿生活、

第三素人下宿生活、第四自炊生活、

△第一 普通下宿生活

これが遊學生中で最も普遍的なものである
ふ、程度は其名の如く普通で、決して餘裕
のある生活ではない、併し一寸閑靜で清潔
な下宿屋の四疊半位を占領し、友人が來れ
ば時々茶菓の一杯も出し、心靜かに勉強す
ることが出来る、一ヶ月間に於ける大略の
經費如左。

一、六圓五十錢（食費） 一、貳圓 三疊

及び四疊半の室料） 一、三圓（授業料其

他研究に要する材料費） 一、三圓五十錢

（油炭湯錢髮洗濯其他雜費）計拾五圓也

△第二 下等下宿生活

これは最早普通以下の生活である、場所も
室も食事も悪く確に安い丈の價はある、が
忍耐すれば健康も保ち勉學にも充分である、
只來客があつても五回に一回燒辛の御馳走、
ランプも三分を二分心で仕まふと云ふ具合、
坊ちやん生活に馴れた人に取つては大に大
に殺風景な感じもする。

一、六圓（食費） 一、壹圓（三疊室代） 一、

貳圓五十錢（研究費） 一、壹圓五十錢（油

炭其他雜費）計拾壹圓也

△第三 素人下宿生活

△これは下宿屋の營業にして居ない家、例
へば小官吏商店其他の家が、二階や茶の間
など不用な室を仕切つて供すのを云ふ、或
は單に室丈貸すのと、序手に食事も其家で
遣つて呉れるのと二種がある、前者は自炊
の項に述へることとし、こゝには後に後者
に就てのみ言ふ、扱素人下宿の經費は如何
と云ふに、室代食費等は下宿屋と比較して
決して、大差はない、但し油炭其他種々な
る雜費の上に於て、下宿屋よりも經濟的で
ある、例へば下宿屋では費消の如何に拘ら

ず、毎月油代として三十錢づゝ捲き上げる、それをこつちでは自分で好きな程求めればよい、其他下宿屋では菓子代の上前を刎れたり、様々な手品をするが素人の家では大抵其憂いが無い、但し素人家では其宿に良否の差あること下宿屋よりも酷い、運がよければ極く良家庭で、只小人數で寂しいから人に居て貰ふなどと云ふ主意で下宿させて呉れるのがある、こんなに出ッ喰わし

たら殆んど自分の家に居るのも同然である、其親切で實意な待遇、恐らく遊學生活中最も理想的なものであるふ、處が人情紙より薄い現金主義のこの世の中だ、かゝる萬縁叢中紅一點はこの廣い東京の中に數へる程しかない、それを見付けるのは僥倖に待つより外無いのである、又一步を誤れば下宿屋より尙數等貧慾な酷い家に宿り合つて散々な目に逢ふことがある、而かも素人下宿生活には多くこの危険が伴ふから油斷ならぬ、誰れでも單純で現金主義な下宿生活に飽きて來ると、美しい家庭的生活が戀しくなる、そこで「かし間あり」と貼札した素人家を探して移る、處が仲々そふ甘くは

行かぬ、美ん事失敗して再び下宿に復活するのも多い、一體下宿屋は近來信用上の競争より、大分内容も改良したから、比較的危険は少ない、素人の家にはそのことが無いから危いのだ、兎に角この牛活法は選擇に充分の注意を拂われれば多くは失敗に陥るものである、經費は下宿と大差ないから省略する。

△第四 自炊生活

これも贅澤すれば限り無しだが、先づこの方法が一番經濟的で且うまく遣れば衛生的である、が仲々以て成效せぬものだ、僕も折角道具など買い揃へて置いて僅々一週間の後に胃を脱いだ一人である、小さい時から炊事に馴れた人にはそふ難事でもなからう、併しその御經驗のない人には仲々骨の折れるものだ、この生活法に至つては確に婦人諸君に一步を譲る、姉や妹と一よに遊學して居る人は必ず自炊生活をすべきである扱て其方法は如何、先づ前項に述べた素人屋の間丈貸して呉れる處を探す、便利上二階より下、下よりも輿座敷で裏の木戸から出入の出来る處がよい、室が定まつたら道具

を揃へ食品を求めて取りかゝるのだ、道具などは成るべく古道具屋で求めるが宜しい、が熟練せぬ内は尙更のこと、たとへ熟練してからでも、一回の食事の用意から後の整理までに、どうしても一時間以上を費さねばならぬ、この時間が中々惜しいものだ、それから井戸端に出て隣りの女房や向ふの娘と一所に、米を研いだり皿を洗つたり、これが何だかうるさいやら恥しいやら、先づ面の皮を千枚張りにしてかゝる必要がある、而して經濟上より言ふも其他の便宜上より云ふも極く、腹の合つた友人と二人位で、交代に遣つて行く方が得策である、この共全生活は下宿生活でも素人屋生活でも一般に有効なものである、第一室料が半減する、ランプが一つで宜い、一人で居るとツイ退屈になつて大福餅でも煩張りたくなるのを妨ぐ其利益は枚擧するに隙あらずだ、但しあまり人數が多くなると屹度失敗するからそれは二三人までが一番良い、兎に角この自炊生活は意志が充分鞏固で、根氣が餘程強くなければ仲々永續しないものだ、自炊生活に志す諸君は、宜しく緊纏一番大に勇

氣を鼓舞してかゝり玉へ。

少し倦怠を生ずるとモウ御仕舞ひだ、あらゆる悪魔は猶豫なく押し寄せて来る何分少し頭痛でもする日には、今更煙い顔をして竈の下をパタ／＼遣るのが悲しくなる、そこでツイ筋向ふのパン屋に走って、食パン半斤をムシヤ／＼遣って腹の虫を納得させる、又或時は佃煮や福神漬や鹽魚と云ふ風に手のかゝらぬものゝみで仕まい度なる、それが度重なる、サー甘いものが喰い度くて堪らなくなるそこで遂にさしみや牛肉などを大に喰ふ、金は要る腹は損なふ、二罪俱發だ、そふなると最早秩序が亂れて、如何しても仕末におへなくなる、終に失敗の恨を呑んで折角買つた道具一切は二束三文で道具屋に拂い下げ、悄然として下宿屋の門をくゞるに至る、僕なんぞその一週間の生活中に散々な奇談を残した、

話せば浪六の當世五人男も跣足だが冗長に渉るから止さう、左に最初一ヶ月間に要する經費の大略を示さう

一、壹圓(最簡單道具費)一、三十錢(醬油)一、拾八錢(味噌)一、拾錢(松魚節)一、

六十錢(炭)一、貳圓八十錢(米代)一、壹

圓五十錢(副食物)一、一圓(室代)一、貳

圓(研究費)一、壹圓三十二錢(雜費)計十

圓八十錢也

それで次の月からは道具費が加わらぬから都合九圓八十錢で遣れる譯だ、但しこれは凡てに極度の儉約を試みた結果だ、併しこれ遣って行けることは保證する。

この他七八人の全志が集り、少し廣い家を一軒借り、下女を置いて炊事させる共同生活法もあるか、多く失敗に歸するから略する。

△宿所の撰擇

これは生活上最も重要な事で充分に説明したいが、あまり多く頁を費すに忍びないから茲には只簡單に述べて置く、美術學生の擇べぶき地理上の位置は何處が良いか、先づ少々便利は悪くとも第一に高燥閑佳なる而かも郊外寫生に行くのに時間を要せぬ處が良い、即ち小石川、本郷、下谷、牛込等の郡部に近い高台が適當である、それから家庭上の撰擇では、拾歳以下の小兒、支那留學生、不得要領の庇髮等の居る家は全然

避ける様にせねばならぬ、小兒は騒しく、清國人は不潔にして騒しく、怪しい庇髮は危険なからである、尙終りに一寸注意して置く事がある。それはたとへ運賃が幾何かゝつても、夜具や蚊帳や其他従前用ひ來つた日用品は、一切之を持ち來るべしと云ふ事である(了)

自筆繪葉書(上)

究美

落日が權兵衛峠の上に沈んで、今まで藍色であつた初秋の空は黄色に變はり、此處彼處にさまよつて居た綿の様な白い雲も朱色に染まつて、野と云はず山と云はず森と云はず家と云はず赫焉として燃えないものもなく、其美景つたら云ひ様がない。我れは此の美しい夕照の空を寫生すべく、此處の丘の上でしきりに筆を走らせて居たすると後で寫生ですかと云ふ人がある、振向いて見たら一人の青年で、顔はいたくやつれて青ざめてどこか沈んだ様子である、此人は我等の先輩で、今は東京へ出て勉強して居る人だ。(まだある)

*

*

*

*